

# 清末の漢訳小説『経国美談』と戯曲『前本経国美談新戯』

——明治政治小説『経国美談』の導入、受容をめぐる

寇 振 鋒

## 1. はじめに

清末の漢訳小説『経国美談』とは、明治日本の政治小説『齊武名士・経国美談』の漢訳本である。戯曲『前本経国美談新戯』とは、漢訳本の政治小説『経国美談』を底本として戯曲化され、受容した『経国美談』である。

矢野龍溪著の『経国美談』は、日本で画期的な成功を収めた、当時青年読者の間に多大の反響を巻き起こした政治小説である<sup>1</sup>。そしてそれ以後の明治政治小説の端緒となった。その後、原作『経国美談』は漢訳され、清末の亡命政治家梁啓超の主宰する『清議報』に連載されて、『佳人之奇遇』とともに清末政治小説の流行をもたらした。また連載直後、清末の小説家李伯元によって『前本経国美談新戯』と名づけて戯曲化され、そしてまもなく上演された。『新編増補清末民初小説目録』によれば、漢訳小説『経国美談』は、八つの版本があり、戯曲『前本経国美談新戯』は、『世界繁華報』『繡像小説』『遊戯報』という三つの新聞、雑誌にそれぞれ掲載され、また、「西劇」としても演劇化されたことがある<sup>2</sup>。これで分かるように、原作『経国美談』は、清末の中国において最も影響力の強かった政治小説であると考えられる<sup>3</sup>。

しかしながら、三者の継承関係に関する先行研究は、いまだ多く見られない<sup>4</sup>。そのために本稿は、これらジャンルの異なる三つの作品を貫く軸はどこにあるか、それを通して、原作『経国美談』は如何に導入、受容されたか、を明らかにし、その間の政治的背景の一端を考察しようと思う。

## 2. 三つの『経国美談』の梗概

### 2.1 原作『経国美談』の梗概

前篇の梗概（二十回 1883.3<明治16.3>報知社刊行）

紀元前382年、希臘の小国齊武では、民政党（正党）と専制党（奸党）の内

部抗争が起っていた。斯波多の後援を得た奸党が国政を一手に握るところから物語が始まる。「仁」を代表する、強力に対して反対の威波能は公会堂に正論して奸党に捕らえられた。「智」を代表する、身をすてて救民を願う巴比陀、「勇」を代表する瑪留等諸名士は、阿善へ亡命した。巴比陀は阿善の公会堂で雄弁を振り、援兵を乞うが、阿善にも民党と奸党があった。民党の行政官李志は巴比陀を助けようとするが、奸党に反対された。民政の回復のための奇計を用いるのに反対する威波能を押し切って、巴比陀等志士十二人は変装して、比留利の家に招かれた奸党の巨魁を殺した。民政回復後の斉武は、直ちに斯波多の攻撃をうけようとする危機に陥る。

後篇の概要（二十五回 1884.2<明治17.2>報知社刊行）

斉武は斯波多の攻撃に応じ、阿善と連盟しようとする。しかし阿善ではあいにく平邪が一身の功名を狙うために、細民を煽動して政権を握り、純正党が迫害を受けた。名将智猛周、可武利が乱民を退けて旧政が回復した。斉武、及び斉・阿の同盟によって、斯波多軍の三回の斉武への侵入は失敗に終わった。しかし、斉・阿両国は軍費の分担を巡ってうまく行かなくなった。希臘全土の和平会議上で、斉武使節としての威波能は斯波多王に屈せず抗議した。斯波多の同盟軍の第四回斉武征伐は威波能の戦術によって破られた。紀元前366年、斉武は希臘の覇権を握った。

## 2.2 漢訳小説『経国美談』の訳載とその梗概

『経国美談』前篇（二十回）は、『清議報』第三十六冊（1900.2）一第五十一冊（1900.7）に連載された。『清議報』は、日本亡命直後の梁啓超によって、横浜で創刊されたものである。『経国美談』は、『清議報』連載の時に、「前出使清国大臣日本矢野文雄著」と原作者が署名されているが、訳者名はない。しかし訳者は周達であると指摘されている。

後篇（十九回未完、原作第十六回途中の部分に相当）は、『清議報』第五十四冊（1900.7）一第六十九冊（1901.1）（第六十六冊を除く）に連載された。本稿はこれを底本とする。

漢訳『経国美談』は逐語的な翻訳ではない。そのうえ、漢訳版では各回の組みかえもとりわけ著しい。特に原作後篇の第一回の後半部が漢訳の第二回の冒頭に移され、それ以降は順送り、原作第五回はちょうど漢訳の第六回となっている。さらに、原作の第十六回が漢訳の第十八回後半部と第十九回の前半

部に分けられた。すなわち、十九回未完の所は、原作後篇の第十六回途中の部分に相当する。すなわち、斯波多の同盟軍が第四回齊武を征伐する際に、威波能が戦術を提起する途中までである。残りの八回半の分は連載しなかった。他方、原作後篇の最後の四回（第二十二回—第二十五回）はかなり短い。したがって、漢訳時に回の長さのバランスを調整するために、組みかえたと思われる。なお、漢訳『経国美談』は逐語訳ではないが、しかし意識上の忠実な訳だと考えられる。

### 2.3 戯曲『前本経国美談新戯』の掲載とその梗概

戯曲『前本経国美談新戯』（十八齣）は、『繡像小説』第一（1903.5）一五、八、十九、二十、二十二、二十四—三十、三十三、三十四（1904.9）号に連載された。その正式名称は『新編前本経国美談新戯』である。編曲者は謳歌変俗人（李伯元の筆名）と署名する。本稿はこれを底本として考察する。

『新編増補清末民初小説目録』によれば、戯曲『経国美談』の初連載は、『世界繁華報』二〇二号（1901.10）からであり、二回目の連載は、『繡像小説』第一号から行われ、三回目は『遊戯報』第二一二三号（1903.7）から連載されたという<sup>7</sup>。他方、王学鈞の「李伯元年譜」によると、『世界繁華報』第二〇二号所載の『経国美談』は「遇主」の一段落だけで、この期間の連載が続いたかどうかはさらに調査を要するという<sup>8</sup>。「遇主」は即ち第十二齣目の後半である。王学鈞の説によれば、『世界繁華報』所載の『前本経国美談新戯』は、その初めての所載時期を更に遡れよう。なお、『前本経国美談新戯』は第十八齣までで中断された。この「前本」は、『経国美談』の前篇に当たることから見れば、編曲者李伯元は、元々は『経国美談』の後篇も戯曲化する予定であったと考えられる。この十八齣は、原作と漢訳版の前篇第十八回と一致する。すなわち、巴比陀等志士十二人が変装して、比留利ヒルリの家に招かれた奸党の巨魁を殺したところまでである。それ以後は戯曲化されなかったが、しかし齊武の民政回復が成功したというストーリーとして見れば、ここで完結しても、十分納得がいく。これが恐らく、引き続いて戯曲化しなかった理由の一つであろう<sup>9</sup>。『前本経国美談新戯』は、いわばダイジェスト化されたようなものであるが、しかしストーリーや登場人物はほぼそのまま受け継がれた。

以上の三つの作品梗概から見るように、漢訳『経国美談』には、移動、組替

え、加筆が散在している。しかし原作『経国美談』と漢訳『経国美談』は、ストーリー、主要登場人物がほぼ同じであり、内容に忠実な意識だと考えられる。戯曲『経国美談』は戯曲の台詞表現のために、短く書き直され、小説版のダイジェストに見える。しかしストーリー、主要登場人物もまた漢訳本と一致する。そのため、三つの『経国美談』は、ストーリー、登場人物、及びその梗概が重なり、共通していると言える。

### 3. 三つの作品の作者、訳者、編曲者とその思想

#### 3.1 原作『経国美談』の作者矢野龍溪とその思想

矢野龍溪（1851－1931）の本名は文雄、大分県生まれ。明治時代の政治家、文学者である。福沢諭吉について洋学を学び、英米の憲法史を読破した。大隈重信と共に改進黨の結成に参画し、『郵便報知新聞』に入社し、自由民権論を唱えた。改進黨の重要な組織者、花形である。矢野龍溪は、政治小説『経国美談』の発表によって人気を博し、文名を大いに揚げた。明治三十（1897）年三月一三十二（1899）年十月の間は、駐清特命全權公使を務めていた。その当時、梁啓超との付き合いも深かったと考えられる<sup>10</sup>。これは『経国美談』の漢訳と無関係ではなからう。矢野の政治思想はイギリスの立憲制度を模範とし、比較的穏健な漸進主義で、秩序を重視するとともに進歩を図ろうとした。

矢野龍溪の甥に当たる小栗又一は、『龍溪矢野文雄君傳』の中で、矢野龍溪の政治的信念について次のように評価している。

「先生の志は極めて公正である。我国に憲政を布き、民権を伸張すること、これを唯一の眼目とするの外、何等の他意がなかった。＜中略＞従って先生の眼中、国家こそあれ、国民こそあれ、薩もなく、長もなく、土もなく、肥もない。その間何の擇ぶところもないのである。目指す所の第二の維新は、すべての封建的思想を超え、あらゆる恩怨を云為せず、公平に打建つべきものと信じてみたのである」<sup>11</sup>。

小栗又一に評価されたように、憲政を布き、民権を伸張することが、矢野龍溪の主な目標であった。また矢野龍溪の眼中には、国家、国民しかない。そのために、『経国美談』は改進黨の綱領第一条「王室の尊榮を保ち、人民の幸福を全うす」<sup>12</sup> ということを表す一方、矢野龍溪の「超党派的」<sup>13</sup> 愛国、救民の思

想をも反映していると考えられる。

### 3.2 漢訳『経国美談』の訳者周達とその思想、及び導入との関連

周達(1878-?)の別名は宏業、号は伯勳、雨塵子で、湖南の生まれである。1897年に黄遵憲、譚嗣同等が、湖南で時務学堂を創立し、梁啓超を教員に招聘して、四十人の学生を募集した。周達はその学生の中の一人である。彼は、学堂中の優等生であった。戊戌政変後、康有為、梁啓超が日本に亡命し、時務学堂も閉鎖された。周達等十一人は、清朝政府の圧迫に屈することなく、転々として日本に亡命し、先生である梁啓超の所へ身を寄せ、梁啓超によって設立された東京高等大同学校にて学習する<sup>14</sup>。そして、『経国美談』と深い縁を結ぶことになった。

先生である梁啓超は、「飲氷室自由書」で、「例えば、<中略>矢野龍溪の『経国美談』(矢野氏は、今中国公使であり、日本文学界の泰斗で、進歩党の傑物である)などである。<中略>また国民の脳に滲み込むのに最も効力があつたのは、『経国美談』、『佳人奇遇』の両書が一番であつたという」<sup>15</sup>と、日本の政治小説とくに『経国美談』、及び矢野龍溪を大いに称えた。しかもこの文章は、梁啓超訳の『佳人之奇遇』の巻八の最後の部分と同じく『清議報』第26冊に載っている<sup>16</sup>。ここから、この期間には、『経国美談』の漢訳も計画中であつたと推測される。なお、『梁啓超年譜長編』によると、「先生(梁啓超——寇注)が来日してまもなく、十数名の<湖南>時務学堂の学生が先生を追って日本にやって来た。この年(1899——寇注)、先生は彼らと研鑽の日々を過ごすことが多かった」<sup>17</sup>という。それ故に、『経国美談』の導入の決定も、当時の研鑽の内容に入っていたと考えられよう。

しかも、周達は、漢訳『経国美談』を梁啓超の主宰する『清議報』に連載し、そして、自ら執筆した「論世界経済競争之大勢」の文章も、梁啓超の主宰する『新民叢報』第十一号、十四号に連載した。また、後に自ら創作した「専制政治に反対する」<sup>18</sup>とする『洪水禍』を梁啓超の主宰する『新小説』第一号と第七号に連載した。『洪水禍』は梁啓超の政治小説『新中国未来記』と同じく『新小説』第七号で未完のまま中断する。このように、周達の執筆活動と梁啓超との関係を見ると、当時の周達の思想は梁啓超の改良思想と歩調があつているので、少なくとも革命的傾向を持った維新派に属すると考えられよう<sup>19</sup>。

### 3.3 『前本経国美談新戯』の編曲者李伯元とその思想、及び受容との関連

李伯元(1867-1906)の別名は、李宝嘉である。江蘇省武進の人、字は伯元、南亭亭長と署名してあるものもある。筆名に游戲主人、謳歌変俗人などがある。清末の小説家、編集者で、譴責小説の代表的作家である。

1897年6月に上海で『指南報』、『游戲報』を相次いで創刊し、1901年4月に『世界繁華報』を創刊する。1903年5月に半月刊の『繡像小説』が創刊される。李伯元は商務印書館の招きに応じて、『繡像小説』の主編に従事した。彼は小説によって、清の朝廷官吏の愚かしい腐敗や汚職を暴露し、厳しく非難して、その政治的傾向は改良派に近い。李伯元は社会改革を主張するが、しかし激烈な手段で変えていくことに反対であった。阿英は李伯元について次のように記している。「彼は温情主義者であって、く知らず知らずの間に感化>することを主張する。彼は維新を主張するが、しかし過激な手段をとることは反対で、民族革命に対して吳趸人と同様、反対の態度をとっている」<sup>20</sup>。ここから分かるように、李伯元の穏健な思想は、『前本経国美談新戯』の戯曲化の動機と成り得る。

以上三人の経歴から見るように、矢野龍溪の考え方は穏健な漸進主義思想であり、さらに言えば、「改進黨的改良主義」<sup>21</sup>の思想である。周遠は多少の革命的傾向を持つ改良派に属する。李伯元の思想も、改良派に近い。そのため、三人の基本的思想には、社会改良を主張すると同時に、強力による改革に反対する共通点がある。そして、その強力反対の穏健の思想のほかにも、超党派的な愛国、救民の思想も十分表れている。これらが『経国美談』の導入と受容において欠かすことのできない動機となったであろう。

### 4. 三つの作品における主軸としての思想とその関連背景

三つの作品の共通点について、王学鈞がかつて若干触れているものの<sup>22</sup>、その三者の継承関係は詳細に論述されていない。そして、三つの作品を貫く主軸としての党派的、及び超党派的な政治思想が明らかに現れている。なお且つ、三つの作品には政治的導入、受容、ないし継承関係を有する。次に主に三つの作品において重なっているプロットを取り上げて、原作『経国美談』がその主軸を通して、どのように導入、受容されたか、について分析していくことにする。

#### 4.1 原作『経国美談』における思想とその背景

明治十四（1881）、十五（1882）年、日本の自由党、改進黨が相次いで結成された後、両党の政治闘争は激化した。改進黨は、イギリスの議会政治を模倣して、穩健的進歩主義を主張し、直接行動を避ける。それに対して、自由党はフランスの議院政治を模倣する。『経国美談』創作の政治意図は、矢野龍溪が「かねてより人心を作興せしめないかぎり憲政の確立は望めないと考へていた」<sup>23</sup>なので、それによって立憲運動をひき起こそうとすることにあつた。そのため、龍溪は小説中で、何よりも自党派改進黨の秩序のある政策、穩健主義を強調して、反対党自由党の急進政策、過激主義を排する意図を示す。しかし、国家の大局から見渡した場合、超党派的な「国の独立」「民の独立」の思想が小説の方々に散在している。

前篇第一回、小説の下地として学堂の先生が少年時代の主人公巴比陀、威波能、瑪留等に、隣国阿善の賢王格徳王、賢士士良武の済民功業を講じる。格徳王は、自身が殺されなければ敵軍が大いに勝つという占いを知って、救国救民のために、命を投げ出す。「然ルトキニハ我一人ノ身ヲ捨テ、無數ノ国民ヲ救ヒ得ベシ。アゼン一國ノ獨立ニ比較スレバ、我身ハ羽毛ヨリ尚ホ輕シ。今人民ノ危急ヲ救フハ、是ニ勝レル手段ハアラジ」と決心して、一人で敵陣に入り、戦死した。阿善人民は終に滅亡の危急を免れて、阿善も次第に富強の国になった。なお、阿善の三十奸党時代において、旧来の民政政權は、三十奸党が奪い取って寡人専制の政体に替え、無数の人民が冤刑に陥った。「慷慨ニシテ大節アリ、常ニ人民ヲ濟フヲ以テ、其ノ志ト為セシ」賢士士良武は、「今其ノ国人ガ、斯ル塗炭ノ苦ミヲ見ルヨリ、何トゾ旧來ノ民政ヲ、回復セント」と決心した。彼は齊武に亡命し、時機を待って民政を回復しようとした。遂に同志の者等と回復の事を起こし、奸党を捕まえて、旧政治の回復が成功した。「士良武ハ人民ノ為ニ、斯ル大功業ヲ立タルノ名士」となった。すると、少年の巴比陀は、先生に教えられた士良武の事跡を聞いてから、「余ハ最モ士良武ニ、為リ度ク思フナリ。若シ我々成人ノ後ニ至リ、我ガ國ニ三十奸党ノ如キ者アラバ、余ハ身を棄テ、士良武ノ如ク、人民ヲ濟フベシ」と言う。このように、救民のために死んだ格徳王、民政の回復に努めた士良武が、少年時代の齊武志士たちの偶像となった。

前篇第五回、亡命途中の巴比陀は、川に落ちて流され、かつて巴比陀に助けられた老漁夫に救助された。老漁夫は、「是レヨリ直チニ、隨從セヨ。獨リ恩人ニ報フノミニアラズ、國ニ尽スノ務メナリ」と、息子に命じ、巴比陀と同行さ

せる。このことについて、藤田鳴鶴は、次のように「尾評」する。

「漁夫が息子を教諭す言葉は、味わうに値する。思うに、民政の国であるから、江畔の漁夫でさえ、国家のことを大事にすべきことを知っている。これは作者が最も意図を持っているところであろう」<sup>240</sup>。

言わば、矢野龍溪の意図は、恐らく明治青年読者を民政伸張、及び愛国、救民思想に感化させることにあったであろう。これは、まさしく後述するように漢訳時に周達が共鳴したものである。

前篇第六回、巴比陀、瑪留は、阿善に援兵を乞うために、行政官李志に助力を求めた。李志は次のように言う。

「総テ自由主義ノ人ハ、人民ノ幸福ヲ以テ、其心トナスガ故ニ、人民ノ不幸ヲ憫ムノ情ニ厚クシテ、假令ヒ他国ノコトナリトモ、人民ノ不幸ヲ見ルトキハ、之ヲ救ハント欲スルノ情、自ラ止ムコト、能ハザルニ因ルナリ」。

この救民思想にもとづき、他国のこととはいえ、李志は人民の不幸を見る時にこれを救おうと欲する。これは李志の「大義」的超党派的救民思想の反映である。

前篇第八回、斉武正党名士以斯明は、奸党に牢獄中に監禁され、「然レトモ、一片憂国済民ノ熱心ハ、返テ益々其ノ身中ニ、鬱積スルノ状ハ、自ラ悲壯無念ナル、容色ノ中ニ発露セリ」という様子であつた。しかし護国のために、「当時我ガセーベ人民ノ、独立ヲ保ツニハ、勢ヒ諸州ヲ連合シテ、敵国ニ争抗セザルヲ得ズ」という以斯明の主張は、逆に奸党に罪を問われ、死刑にされた。これは「国事ニ尽力シテ、内ハ人民ノ幸福ヲ謀リ」、それに専念し、身をすてても救国救民を目指す名士への謳歌であると言える。

前篇第十一回、召使令温は主人巴比陀を探すために、かつて巴比陀の作った短歌「春ノ花」を琴で演奏する。巴比陀は単身で本国に潜入しようとして、途中の山家に空しく病気にかかるが、しかし月夜にこの歌を聴いて、遂に主従の再会ができた。

「見渡セバ 野ノ末、山ノ端マデモ 花ナキ里ゾナカリケル

今ヲ盛りニ咲キ揃フ 色香愛タキ其花モ <後略>

この長歌は、当時の明治青年に盛んに朗詠されたのみでなく、暗唱されたものであった。それは「やがて来るべき立憲政治の春を迎へるがために、霜雪の艱苦を忍ぶべきことを諷示し、民権政治家に勇気を吹き込んだものであった」<sup>25</sup>と言われたように、明治青年を鼓舞するために作られた。

後篇第二、三、四回、阿善では煽動者平邪が一身の功名を狙って、細民を煽動し、極端な平等主義、過激な共和主義を主張する「平等邪道」<sup>26</sup>に細民を引き入れた。阿善で大革命が巻き起こされた。乱民と純正党は正面衝突し、諸名士が遭難し、李志も免れることができず、阿善は血生臭い混乱に陥った。平邪は阿善の政権を握ったものの、暴民の勢力がますます強まる中に、過激派中からさらに過激派を生じ、結局平邪自身も暴民に投獄された。

この秩序を守らずに、徒らに空想、血気に任せる過激な行為は、結局成功できないばかりではなく、国家人民にとって大害を招くほかない。「秩序」のない平邪の乱は、ちょうど改進黨が「結党の初めより秩序的進歩を首唱したるものなり」<sup>27</sup>とする逆の角度から書かれている。また、「自由党は貧しい農民や都市の労働者の立場に、立憲改進黨は富裕なブルジョア階級（主として都市の商工業者）の立場を代弁していた」<sup>28</sup>と、両党派の代表的立場が指摘されたように、矢野龍溪は自派の立場から平等主義に反対したのであろう。つまり、この部分の『経国美談』の挿話は党派的に見れば、「暴力手段をあくまでも回避しようとする、温健的な作者の党派的性格」<sup>29</sup>が見られる。

以上のように、原作『経国美談』においてその民政回復、強力反対の党派思想も現れているし、超党派的愛国、救民の思想も、明確に散在している。その党派思想はちょうど清末梁啓超などの改良派の思想と一致するのである。一方、その超党派的愛国、救民の思想も、同じく清末中国の知識人たちの共感と呼んだ。そのため、原作『経国美談』の思想はそのまま漢訳『経国美談』に受け入れられたと思われる。

#### 4.2 漢訳『経国美談』における思想、及びその導入背景との関連

漢訳『経国美談』は三者の間で媒介としての役割を担ったと言える。漢訳『経国美談』は『清議報』に連載されているので、まず掲載誌『清議報』における代表的思想を見ておこう。『清議報』は梁啓超が日本亡命後、初めて主宰した雑

誌である。創刊目的は、『清議報』を「国民の耳目、維新の代弁者」としようとすることにあった。「維新の代弁者」とは、恐らく清朝における維新政治の回復をめざそうとしたものであろう。なお、『清議報』の宗旨第一条は、「支那の清議を維持し、国民の正気を激発する」<sup>30</sup>ことである。「国民の正気」は、国民の愛国思想だと思われる。

『清議報』第九冊に梁啓超は「尊皇論」を発表し、「中国を保全するには、皇帝に頼らなければならない」<sup>31</sup>という保皇思想を主張した。つまり初期『清議報』の内容は、主として西太后、袁世凱等の保守派を非難する文章以外は、ほとんど保皇立憲の文章であった。梁啓超は、『清議報』第三十冊の「飲氷室自由書」の中で、「破壊主義」を主張し、民権自由の説を大いに唱道し、また革命派と合作の計画を正式に立てたが、しかし結局それぞれ異なった道を歩むことになった。「その原因を究めるならば、双方の各自主張する主義の異なるのが、問題点の所在であった。なお、双方の指導者の基本的観念、思想背景が異なるのも、重要な要因であった」<sup>32</sup>。そのため、『清議報』に存在する思想は、やはり維新派の改良思想であると言える。つまり、『清議報』は救国を宣伝し、民権を鼓吹し、封建専制に反対し、立憲君主制を主張し、維新政治の回復をめざした雑誌である。原作『経国美談』の思想はちょうどこれらと合致していた。

前に述べたように、『経国美談』漢訳時において、逐語的で忠実な訳ではないが、しかし原作における思想はほとんど受け継がれ、小説作品の中に、十分反映されている。以下この点を見てみる。

原作『経国美談』の前篇第一回、老翁によって講じられた、阿善名士の士良武の「人民ノ為ニ、大功業ヲ立タル」ことはそのまま訳されている。その後で周達は、「それら草木のような腐りきった婦人、無能な男に比較すれば、どうだろう。英雄になるほうがいいか、それとも婦人、無能な男になるほうがいいか、を考えて見よ」という訳者自身の議論をつけ加えた。無能な清末の政府は列強に屈するが、しかし「人民」の精神を奮い起こすべきだ。それゆえに読者に専制反対、民政伸張、救国救民の英雄になってほしい。これは恐らく訳者が議論を加えた動機であろう。

原作前篇第五回、亡命途中の巴比陀は、かつて助けた老漁夫に救助された。老漁夫が息子に教え諭す言葉は、周達にそのまま訳されている。原作の民政回復、愛国、救民の思想をそのまま受け入れたうえに、周達はそのすぐ後で、「読者よ、この齊武の農民すら愛国を知っており、自分には国のための責任がある

ことも知っているらしい。国の栄える理由はここにあるはずだ」、という彼自身の言葉を加えた。周達にとって、「国の栄える」理由は愛国にある。富強の中国を作るために、読者の愛国心、及びすべての国人の愛国心を喚起しなければならない。なおまた、後述するように、李伯元は、『経国美談新戯』の中で、同じくその愛国の思想を受け入れている。

『経国美談』漢訳時に、組替え、省略、加筆がよく見られるが、しかし原意を改変する箇所はほとんどない。ただ、原作前篇第十一回、「春ノ花」は、ほとんど関係のない「短剣行」に改変された。そして、漢訳の第十二回に移している。「短剣行」の一節を次に示す。

「我有短剣兮、以斬佞臣。丈夫生世兮、以救万民。＜後略＞（私が短剣を持つのは、それは奸臣を殺すため。男子が世に生まれたからには、万民を救うため。＜後略＞）」

原作の「忍耐」は、訳者周達にとって愛国、救民の思想を十分反映できないものと思われた。そのまま訳すよりも、むしろ「短剣行」という直接的形式で愛国、救民の思想をはっきり表す方が更に役に立つと考えたのであろう<sup>330</sup>。「丈夫生世兮、以救万民（男子が世に生まれたからには、万民を救うため）」は、愛国の士を喚起し、愛国、救民の思想を喚起しようとしたものである。巴比陀のように、訳者自身も海外亡命の中で、国内の国難、民難を痛感し、愛国の重要性を実感できたのであろう。志士を慰める、忍耐強い「春ノ花」は、訳者の好みに合わない。そのため、改変された「短剣行」によってこそ、訳者の維新政治の回復のための積極的愛国、救民の思想を表すことができた。

なお、後篇第一回には、斉武の民政回復後、愛国心が強くなったという節がある。この部分は逆に漢訳時に省略されている。これは愛国心が重要でなくなったからではない。愛国心は、当時日本亡命の清末の維新志士等にとって、時時刻刻忘れられないものであった。そのために、民政回復してから初めて愛国心が強くなるのは、周達の最初からずっと「国の栄える」理由が愛国にあるという愛国心の主張と矛盾する。むしろ、これは訳者が民政回復と愛国心を切り離すことができないものとして取り扱った意図であろう。

後篇第二、三、四回、平邪の乱は、漢訳の後篇第二、三、四、五回に組替えられた。平邪は、「黒搓」と音訳されている。訳者は、原作の強力に対する反対、

極端な平等への反対の思想をそのまま受け継いだ。訳者は国家の大局から見るべきとし、如何なることでも、国のため、民のためにしなければならないとする。そのため訳者は平邪の空想的、秩序を守らない改革に反対する立場に立った。すなわち、周達は、秩序を守る改革を主張し、極端な過激思想に反対し、穏健な思想を主張している。

清末の〈豪傑訳〉の時代は、原作の思想が勝手に変えられた<sup>34</sup>。しかし『経国美談』における党派的民政回復、強力反対の改良思想、及び超党派的愛国、救民思想は、ほとんどそのまま漢訳本に受け継がれた。つまり、訳作の思想は原作の思想とほとんど一致したものであった。さらに言えば、原作の思想が清末の改良派の政治思想にぴったり合ったからこそ、政治小説『経国美談』は清末中国に導入されることができた。また、そのために、導入された訳作は同時代の李伯元に重く見られて、戯曲化されたのみならず、それ以後の魯迅などの知識人の間でも広く読まれた。

#### 4.3 『前本経国美談新戯』における思想、及びその受容背景との関連

『前本経国美談新戯』は漢訳政治小説『経国美談』を介して作られた戯曲であることから、原作『経国美談』を間接的に受容した存在であると言える。この政治小説を戯曲化した動機が、娯楽、遊戯の目的に基づくものであるとは思われない。その目的は一体何であったのか。阿英は、「西洋のことを借りて維新運動を促進させるためである」<sup>35</sup>、と言う。さらに言えば、『経国美談』が改良派に近い李伯元の共感を呼んだからこそ、李伯元は西洋の題材を利用して、維新と社会改革を主張し、困難な旧社会を改革しようと意図したのであろう。したがって、『前本経国美談新戯』は功利的、政治的戯曲であると言える。

また、『経国美談』の戯曲化は李伯元の創作態度の転換を表すとされる<sup>36</sup>。それに基づけば、『経国美談』の戯曲化等を通して李伯元は遊戯的創作態度から救世救国的厳正な創作態度に変わったと言えよう。つまり、『前本経国美談新戯』が李伯元の創作意識へ積極的影響を与えたことが窺える。そのため、政治小説の功利性がある程度、李伯元の戯作的「遊戯」態度を変え、李伯元の維新改良、愛国、救民の思想を一段と強めた。次にその戯曲化の背景を見てみよう。

最初の掲載紙『世界繁華報』は、『庚子国変弾詞』と『前本経国美談新戯』をほぼ同時に連載し始めた。両作品は『辛丑条約』が締結され、義和団事変が結着した時点で掲載された。『庚子国変弾詞』の内容にもとづいて、『前本経国

『美談新戯』の執筆の時代背景なども窺うことができよう。「中国大衆の一部の苦難史である」<sup>37</sup>と言われる『庚子国変弾詞』には、八ヶ国連合軍が家を焼き、人を殺し、財産を略奪する残虐行為も描かれ、更に一般庶民の困窮流浪、家族離散する悲惨な光景も描かれた。国家の危機的状況を描くのは、社会改革の緊迫感と必要性を際立たせる。1900年の義和団事変以後、清朝政府はさらに列強に屈した。「有識者はすでに改革を翻然と思い出し、敵愾の心によって、維新と愛国を呼びかけ、＜富強＞に最も熱心であった」<sup>38</sup>。李伯元はそうした識者中の一人であった。それ故に、現実社会を改革し、氣力を振り起こすために、前向きの視点から民政回復、愛国、救民が描かれた『経国美談』は、ちょうど李伯元の視野に入った。士氣高揚する『前本経国美談新戯』は意気消沈する『庚子国変弾詞』の補完物となる。ここからすれば、両者の内容はつながっている。これが『経国美談』を戯曲化し、同じ『世界繁華報』に載せた理由の一つであると考えられる。

前述のように、『前本経国美談新戯』の第二回目連載は一年半以後の『繡像小説』の創刊からである。『繡像小説』創刊号巻頭に掲載された発刊辞「本館編印繡像小説縁起」において、「欧米にて国民を開化するのは、多く小説による」と記すとともに、欧米の小説創作の目的は、「齊民の耳目を自覚させるためである。或いは人群の積弊に対して砭を下し、或いは国家の危険に対して鑑を立てる。その立意を推し量るに、国に役に立ち、民を利するにあらざるものはない」とする。しかし中国の小説は「怪誕、荒唐でなければ、汚濁、邪淫の事を記すものである。やや国の為役に立つ、やや民の為に利するものを求めれば、殆ど百分の一も得られない。＜中略＞講談歌唱は、最も人々を感化し易い」ので、「本館は上述に鑑みて、「愛国君子」に「この編を嚆矢としていただきたい」<sup>39</sup>、という発刊目的を述べている。

「本館編印繡像小説縁起」は李伯元の手によるものではないかもしれないが<sup>40</sup>、「従来の中国の小説には国や民を利するものがほとんどない。そこで西洋や日本に範をとって下愚を開化しようというのである。これが『新小説』の意図を踏襲していることは明らかであろう」<sup>41</sup>、との指摘がある。このことからすれば、梁啓超等の改良派からの影響も明らかであろう。

ここから分かるように、第二回目連載の理由は、『前本経国美談新戯』が「本館編印繡像小説縁起」の宗旨、及び「＜改革＞と＜愛国＞によって＜文明＞を追求する宗旨」<sup>42</sup>に合うことによると思われる。もう一つは、「講談歌唱」の一

つとしての戯曲には知らず知らずに人々を感化する宣伝効果があるからである。また、李伯元は自ら創作した、一更から五更までの時間の推移によって愛国者の抱負を謳歌する『愛国歌』を、同じく『繡像小説』第一期に掲載している。このように、第二回目の連載も同じく『前本経国美談新戯』において、愛国と救民、及び社会改革を主張する思想があったためであろう。次に実作と結びつけて見よう。

『前本経国美談新戯』には、「救同胞」「為国民」「救国民」「救民」「為国事」「報国家」「為国難」等や「回復民政」「回復」「専制」「民政」「復民政」等の言葉が頻繁に出てくる。これで分かるように、李伯元は、明らかに、愛国、救民の思想、及び民政回復の思想を強調しようとしたのであろう。

原作第二回「希臘列国の形勢」は、漢訳時に、第二回の前半に組替えられ、原作第三回の前半と組み合わせて、漢訳本の第二回となった。しかし『前本経国美談新戯』においては、漢訳本の第二回の前半に当たる、主に阿善、斯波多、斉武三国の政体を紹介する「希臘列国の形勢」が削除された。この削除は、恐らく戯曲の舞台表現のためであろう。

また、原作第四回はそのままだ漢訳された。しかし戯曲化の時には、第四回の前半と後半が入れ替えられた。戯曲の前半は斉武の公会が奸党の頼った斯波多の軍隊によって解散されたことで、後半は奸党が斯波多の軍隊の力を借りる顛末である。この原因結果の関係の転倒は戯曲の舞台表現のためであろう。ただ公会上の名士維波能と奸党の激しい政治論争が比較的薄められた。しかし民政回復、愛国救民の思想は決して弱まっていない。

原作第十回には、「奸党等ハ嚴シク、之ヲ糺問セシニ、安知本ハ苦装ニ堪ヘズシテ、遂ニ阿善ニ在ル、有志者ノ有様及ビ、其計略ノ大体ヲ、白状シタリ」という安知本白状の一節がある。

漢訳時は、「安知本はどうしても白状しなかったが、刑に堪えられず、ただすこしだけ供述した」と訳した。原作になかった「安知本はどうしても白状しなかったが」の部分は、訳者によってつけ加えられた。

李伯元の戯曲は、「安知本はどうしても白状しなかった」という話をさらに詳しく展開し、安知本は白状しないのみか、かえって「奸臣よ、我々同志者の所在を問うのか。それは四方に散在している。回復の志は既に立てた。私一人を殺すのは、構わないが、ただ貴方の官職は守れない」という奸党を叱る、頑強不屈の英雄像にされている。

李伯元が自供する安知本を見たくなかったことは明らかである。国家危機の際に、救国救民の英雄志士こそ、謳歌すべきであろう。そこで、安知本はわき役から、民政回復のための救国救民の主人公に近い英雄像に変えられた。

なお、第十二齣中の「短剣行」は漢訳「短剣行」を短縮しているが、しかし「我有短剣斬佞臣、丈夫生来救万民。(私が持つ短剣は奸臣を殺すもの。男子が世に生まれるのは万民を救うため)」という愛国、救民の英雄精神は少しも変わらない。

『前本経国美談新戯』においては、漢訳『経国美談』前篇第十八回までが戯曲化されたにすぎない。しかし以上のことを考え合わせると、小説中の内容は短縮されたが、しかし民政回復、及び愛国、救民の思想は相変わらず中心となる思想である。識者としての李伯元には、帝国主義列強に屈した国を愛するとともに、人民を塗炭の苦しみから救おうとする創作意図が窺われる。そこからすれば、李伯元が『経国美談』における党派的な民政回復、強力反対の改良思想、及び超党派的な愛国、救民の思想に共鳴したのは明らかであろう。これは、まさしく李伯元が政治小説『経国美談』を功利的政治的戯曲にし、また三回にわたって繰り返し連載した最大の理由であろう。なお、この人気度は「西劇」として演劇化された理由にもつながっているであろう。

以上は、三つの作品における関連する内容を取り上げて、作品の思想背景の類似性、及び作品の連続性を分析した。三者のジャンルは異なるが、その主なプロットはほぼ一致している。三者の時代背景は、共に社会改革の時代にある。そこで、このような背景の下で、訳者が原作の内容に対して共感し、編曲者が訳作に対して共感したものであると見られる。

作品内容から見る限り、原作における民政回復、強力反対、愛国、救民思想は、そのまま媒介としての漢訳『経国美談』に受け継がれ、前二者の小説ジャンルと全く違う『前本経国美談新戯』は、骨組みの割振りにおいて、誇大、縮小があるが、しかし中心となる民政回復、及び愛国、救民の思想の主旨はそのまま漢訳本から継承している。戯曲『経国美談』における党派的、超党派的思想は、漢訳本を通じての、原作からの間接的受容である。そのために、媒介としての漢訳『経国美談』を抜いても、戯曲本と原作の間に深い血縁関係をはっきり見ることができる。つまり、三つの作品の内容には、民政回復、強力反対の改良思想が存在するほかに、危難から国と民を救う超党派的思想が明確に散

在している。

## 5. おわりに

『経国美談』は日本であれ、中国であれ、小説の分野であれ、戯曲の分野であれ、共に強い影響力をもった作品であった。本稿では、三つの『経国美談』の作者、時代背景、作品内容などの比較を通して、主として漢訳『経国美談』と戯曲『経国美談』において、原作の思想の導入、受容を追究した。政治小説として、政治思想を宣伝するために創作された小説なので、党派的色彩が強い。しかしながら、国家の大局から見ると、三つの『経国美談』において党派的改良思想のほかにも、超党派的な愛国、救民の思想が、明らかに存在している。作者（訳者、編曲者を含む）の思想から見ても、時代背景から見ても、作品の思想から見ても、三者を貫く主軸の一つは、維新政治の回復を促進させる党派的改良思想である。もう一つは、愛国と救民を呼びかけた愛国、救民の思想である。党派的に見るにせよ、超党派的に見るにせよ、原作『経国美談』の導入、及び受容は、当時の政治思想を背景において、理解し得ることである。更に言えば、その主軸は、三つの『経国美談』には血統を継ぐ政治思想的継承関係を持たせた。

なお、『経国美談』の中国での影響力が強かったという理由は、清末にそれまでなかった「政治思想」を宣伝する政治小説が、帝国主義列強の陵辱下に苦しむ当時の人々を魅了したからである。従来中国小説、戯曲の内容は、皇帝王侯、將軍宰相、才子佳人にほかにならなかった。『経国美談』など政治小説の導入は、清末の伝統小説、戯曲に新しい政治内容をもたらした。また、日本政治小説の導入は伝統小説の束縛を打ち破り、小説の地位を高めるために大きな役割を果たした。

また、李伯元は外国題材の政治小説『経国美談』を現実政治の主題を表す劇に編曲した。この政治戯曲によって李伯元は新しい試みの道を切り開いた。これは李伯元が遊戯の文章から譴責小説の創作に転じるために、思想的基礎を定めたと言えよう。

つまり、この三つの『経国美談』の政治思想的継承関係は、日本政治小説が中国近代文学の前夜へ影響をもたらした明らかな一例であると言える。

注

- 1 柳田泉『政治小説研究』上巻 春秋社 1967.8、p201—204。越智治雄「解説」『明治政治小説集』角川書店 1974.3、p15、16 参照。
- 2 樺本照雄編『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社 2002.4。なお、中華民国時期には、「西劇」（「西洋の劇」という意味であろう——寇注）として演劇化された『経国美談』は、1914.9—1915.1の『娛閑録』（半月刊）誌（5—13期）に連載された。脚本作者は曾蘭と署名する。第一部だけで未完のままである。『娛閑録』所載の『経国美談』は、未見であるが、飯塚容の「中国近代劇の萌芽——〈文明戯〉脚本の諸相」（『演劇の「近代」：近代劇の成立と展開』所収、中央大学人文科学研究所編 中央大学出版部 1996.4、p430）によれば、原作は矢野龍溪の『経国美談』である。そのために、『経国美談』は中国で二回戯曲化されたと考えられる。
- 3 なお、魯迅、周作人、胡適、郭沫若などの知識人はともに漢訳『経国美談』を読んだことがある。周作人「關於魯迅之二」『瓜豆集』所収 止庵校訂 河北教育出版社 2002.1、p162。周作人『周作人日記』影印版上巻 大象出版社 1996.12、p389、392、393。歐陽哲生編『胡適文集』第1冊 北京大学出版社 1998.11、p53。郭沫若「少年時代」『郭沫若自伝』第一巻 生活・読書・新知三聯書店 1978.11、p36、112。
- 4 筆者の知る限りでは、三つの作品ともに触れているものに、若杉邦子の「『経国美談』論——政治小説の“伝播”に伴う変容について」（『九州中国学会報』31号 1993.5）がある。ただし若杉論文は、主に三者の「教育作用」の差異の観点から論述するものである。また、若杉邦子の「關於清末日本の政治小説『経国美談』流入中国的考察——以李伯元的『経国美談新戯』為中心」（熊向東、周榕芳、王繼權選編『首届中国近代文学國際學術研討會論文集』所収、百花洲文芸出版社 1994.7）、王志松の「李伯元和『前本経国美談新戯』」（『北京師範大学学報（社会科学版）』1998年第4期 1998.7）も三つの作品に若干触れている。
- 5 孫繼林「『経国美談』的訳者周適」『清末小説から』第25号 1992.4。
- 6 原作と漢訳『経国美談』に関する比較は、山田敬三「清議報」誌上の漢訳『経国美談』：中国政治小説研究札記（神戸大学『文化学年報』第3号 1984.3）が、かなり詳しく論じている。本稿はこの論文に多く負っている。
- 7 ただ、魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版社 1980）によると、『経国美談新戯』は最初『世界繁華報』『遊戯報』に1901年頃掲載されたとのことである。若杉邦子の「關於清末日本の政治小説『経国美談』流入中国的考察——以李伯元的『経国美

談新戯』為中心」はこの説を引用しているが、しかし筆者は最新の研究『新編増補清末民初小説目録』に従う。

- 8 藤正興主編『李伯元全集』第五冊所収 江蘇古籍出版社 1997.12、p166。
- 9 なお、前掲「關於清末日本の政治小説『経国美談』流入中国的考察——以李伯元的『経国美談新戯』為中心」は、『前本経国美談新戯』の初掲載は1903年5月『繡像小説』の連載として論じている。そこで、その未完の理由について、若杉論文は、1903年5月以後、李伯元の思想が消極的に変わり、樂觀論者から悲觀論者にかわったという理由で、結局未完だったと指摘している。実際には『経国美談新戯』の初連載は1901年10月である。そのため、その未完の理由は1903年以後の思想と関係がないと思われる。因みに、上演のことに触れておく。『経国美談』は、中国で劇化される前に、壮士芝居として日本でも劇化された。自由党の壮士としての川上音二郎の立案で、『経国美談』は脚本化され、明治24年(1891)2月5日に、大阪の堺の卯の日座上演された。「日本改良演劇」と銘打った新派劇の開幕と言われた。当時、大好評を博した。(松永伍一著『川上音二郎：近代劇・破天荒な夜明け』朝日新聞社 1988.2、p59、73、74。伊原敏郎著『明治演劇史』早稲田大学出版部 1933.11、第27章参照)。なお、『前本経国美談新戯』の中国での上演について、歐陽予倩の「談文明戯」によれば、「1900年(光緒二十六年)に、南洋公学で演じた時事新劇『六君子』『経国美談』『義和団』等三つの戯曲がある」(『中国話劇五十年史料集』所収 中国戯劇出版社 1958.2、p49。参照)とする。そのため、『経国美談新戯』は初連載前に既に上演されたことがあると見られる。
- 10 「志賀重昂ト梁啓超トノ筆談」(『日本外交文書』第31巻第1冊 日本国際連合協会 1954.9)中で、梁啓超は次のように言っている。「矢野公使は以前、私と同じく北京に居て、何回かお目にかかったことがある。わが国を親しみ愛する御厚情には、深く感激している。」
- また、「新民説・論進歩」(『新民叢報』第10号 1902.6)中で、次のように述べている。「私は昔黄公度の『日本国志』を読んで、好きになった。それによって東瀛新国の状況をすべて分かると思ったが、都に入って日本公使矢野龍溪に出会って、偶然それに言及した。龍溪はく『明史』によって今日の中国時局を言うことと異ならない>と言った。私は怫然した。彼の説を尋ねた。龍溪はく黄書は明治十四年に完成したのである。我国は維新以来、十年間ごとの進歩は、前の百年間が及ばない。しかし二十年前の書は『明史』のようではないか>と言った。」
- 11 小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』春陽堂 1930.4、p124。

- 12 矢野文雄「予が政党時代」『太陽』第13巻第3号臨時増刊号 明治史第六編『政党史』所収 博文堂 1907. 2、p168。
- 13 柳田泉『政治小説研究』上巻 p201、202。小林智賀平「解題」『経国美談』上巻 岩波文庫 1969. 5。漢訳『経国美談』と戯曲『経国美談』には、同じように「超党派的」思想が存在すると考えられよう。因みに、本稿は小林智賀平校訂『経国美談』上下（岩波書店 1969. 5、7）を底本としている。
- 14 前掲『『経国美談』的訳者周達』参照。
- 15 梁啓超「飲氷室自由書」『清議報』第26冊 1899. 9。
- 16 柴四朗著の原作『佳人之奇遇』は全八篇十六巻の長編政治小説である。梁啓超訳の『佳人之奇遇』は、『清議報』第1冊から第35冊まで掲載された。ただ同誌上に訳載されたのは、巻十二の冒頭部分までで中断された。翌号の36冊から『経国美談』が訳載され始めた。
- 17 丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第1巻 岩波書店 2004. 1、p307。これは、『年譜』の「1899年（光緒25年己亥）27歳」の項目に入っている。
- 18 阿英『晚清小説史』人民文学出版社 1980. 8、p168。
- 19 前掲山田敏三論文は、「いわゆる<革命派>に属する人士であったと考えることができる」と論ずるが、私は賛成しない。
- 20 前掲『晚清小説史』p11。
- 21 野田秋生『矢野龍溪』大分県教育委員会 1999. 3、p119。
- 22 王学鈞「李伯元年譜」（『李伯元全集』第5冊 p18、19）中で次のように述べている。「この小説（『経国美談』——寇注）の大意は、希臘の英雄の国政回復の物語を書いたものである。これを借りて、日本の維新運動を促進させるためである。漢訳版もその意図に従い、これを借りて中国人の愛国思想を激発させようとするとともに、改革を促進させるものである。李伯元はさらにそれを戯曲化し、同じ精神を表わす。」
- 23 前掲『龍溪矢野文雄君伝』p215。
- 24 尾評は元々は漢文である。「漁翁譏子一句可味。蓋民政之國。江畔漁夫亦知有國家。作者最用意処。」
- 25 前掲『龍溪矢野文雄君伝』p218。
- 26 前掲『龍溪矢野文雄君伝』p256。
- 27 島田三郎「党報の發刊を機として我党の進退を明にす」『立憲改進黨党報』復刻版 第1号 文献資料刊行会 1892. 12。
- 28 松尾章一『自由民権思想の研究』（増補・改定版）日本経済評論社 1990. 3、p56。

- 29 猪野謙二「政治・社会小説の流れ」『近代日本文学史研究』未来社 1954. 1、p40。
- 30 「清議報叙例」『清議報』第1冊 1898. 12。
- 31 梁啓超「尊皇論」『清議報』第9冊 1899. 3。
- 32 元氷峰『清末革命と君憲の論争』中央研究院近代史研究所 1966. 12、p9、10。
- 33 この改変について、若杉論文（前掲「『経国美談』論——政治小説の“伝播”に伴う変容について」）は、「原作の名士から漢訳版と戯曲の英雄に変わった」ととらえる。筆者も賛成であるが、ただしその英雄像は愛国、救民の思想という作品の主軸から離れられないものであろう。
- 34 例えば、『経国美談』の前に掲載された漢訳『佳人奇遇』は、訳者梁啓超が文学的技巧の見地や政治思想的見地によってかなり大胆に多く改削した。（許常安「〈清議報〉登載の〈佳人奇遇〉について——特にその改削——」『大正大学研究紀要』「文学部・佛学部」57号 1972. 3 参照。）
- 35 阿英編『晚清戯曲小説書目』上海文芸連合出版社 1954. 8。『阿英全集』第6巻所収、安徽教育出版社 2003. 7、p131。
- 36 前掲「李伯元和『前本経国美談新戯』」参照。
- 37 阿英『彈詞小説評考』中華書局 1937. 2。
- 38 魯迅「中国小説史略」『魯迅全集』第9巻所収、人民文学出版社 1973. 12、p434。
- 39 「本館編印繡像小説縁起」『繡像小説』第1号 1903. 5。
- 40 利波雄一「李伯元と商務印書館——『繡像小説』をめぐって」（『中国文学研究』早稲田大学中国文学会第10期 1984. 12）と張仕英「『本館編印繡像小説縁起』の筆者をめぐって」（『清末小説から』第50号 1998. 7）参照。
- 41 麦生登美江「李伯元の創作意識」『清末小説研究』第1号 1997. 10。
- 42 前掲「李伯元年譜」p182。